

[研究室だより]

研究室を訪れた人々 2001 年度

今年度は日露作家会議〈東京－モスクワ 2001〉を私たちの研究室が事務方の中心となって開催したため、国際交流に関しては、たいへん慌しくも充実した一年となりました。国際的な基準から見て一流の仕事をしている海外の文化人・研究者と直接交流することは、「国際化」が叫ばれている現在、教官にとって特に重要であることは言うまでもありませんが、むしろもっと大事なものは、学生・大学院生にとって強い刺激となり、無形の財産として一生残るということではないかと思えます。また、外国からのゲストを招いての講演会やその他の行事はすべて一般にも公開しているので、ささやかながらも大学の活動の「社会還元」の意味もあると自負しております。

こういった活動を陰で支えてくださっている学内外の多くの同僚の皆様、大学院生・学生諸君、そして協力者の皆様にお礼を申し上げます。なお、本研究室主催のこの種の催しものについては、広く学外の方々にもEメールなどでご連絡を差し上げております。ご希望の方はお申し出ください。(沼野充義)

2001 年 10 月 26～27 日

日露作家会議〈モスクワ－東京 2001〉

日露作家会議〈モスクワ－東京 2001〉は、現代ロシア文壇の第一線で活躍する 6 名の文学者（小説家 4 名、詩人 1 名、批評家 1 名）を日本に招いて、日本の文学者・文学研究者と共同でシンポジウム、セミナー、講演会などを催し、両国間に共通する現代の文学・文化上の問題について討論を行ない、相互理解を深め、文化交流を活性化することを目的として、以下のような組織とプログラムによって開催された。

主催：東京大学ロシア東欧研究連絡委員会

助成：国際交流基金

後援：日本ロシア文学会

協賛：日本ペンクラブ

実行委員 島田雅彦 (作家), 浦雅春 (東大), 金沢美知子 (東大), 西中村浩 (東大), 沼野充義 (東大, 企画責任者), 長谷見一雄 (東大), 安岡治子 (東大), 亀山郁夫 (東外大), 望月哲男 (北大), 桑野隆 (早大), 貝澤哉 (早大), 楯岡求美 (神戸大)
事務局 東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室 沼野充義, 清水道子, 久野康彦, 毛利公美

<プログラム>

2001年10月26日(金) 10:00~16:50

現代ロシア文学セミナー ——来日したロシアの文学者を囲んで——

会場：東京大学 山上会館

ヴラジーミル・ソローキンを囲んで「ロマンは死んだのか?——小説の限界」

司会：望月哲男 (北大) コメントーター：亀山郁夫 (東京外国語大)

ヴァチエスラフ・クーリツィンを囲んで「ポストモダニズムの彼方へ」

司会：貝澤哉 (早大) コメントーター：中村唯史 (山形大)

タチヤーナ・トルスタヤを囲んで「夢想家からミュータントへ——現代小説の新たな地平」

司会：沼野恭子 (東京外国語大) コメントーター：吉岡ゆき (通訳・翻訳家)

ヴィクトル・ペレーヴィンを囲んで「ペレーヴィンは<第9の夢>を見るか?」

司会：沼野充義 (東大) コメントーター：望月哲男 (北大)

2001年10月27日(土)

国際シンポジウム<新しい千年紀の文学に向けて>

——ロシアと日本の文学者による共同討議——

シンポジウム第1部 10:30-13:00 現代世界と小説の可能性

司会：亀山郁夫 (東京外国語大学教授・ロシア文学)

発言者：タチヤーナ・トルスタヤ (作家), ヴラジーミル・ソローキン (作家), ヴィクトル・ペレーヴィン (作家), 藤井省三 (東大教授, 中国文学), 柴田元幸 (東大助教授, アメリカ文学)

シンポジウム第2部 14:00-16:30 街の言葉と詩の言葉 ——大衆文化の時代と文学——

司会：沼野充義 (東京大学助教授・ロシア東欧文学)

発言者：ボリス・アクーニン (作家), セルゲイ・ガンドレフスキー (詩人), ヴァチエスラフ・クーリツィン (文芸批評家), 島田雅彦 (作家), 三浦雅士 (文芸批評家)

会議に対する日本の聴衆の関心は予想以上に高く、会場は常時満員、立ち見も出るほどの混雑だった。10月26日のセミナーには定員30名の会場に50~70名が詰めかけ、10月

27日のシンポジウムは、定員100名の会場に常時100人から120名ほどが入り、聴衆は2日間でのべ300人は下らないものと思われる。特に、聴衆の中にこのためにわざわざ自費で来日したアメリカ人の大学教授や、韓国の研究者グループもいたことには、感激させられた。

大手新聞各紙がそろってかなりの紙面を割いて記事を掲載してくれたことからわかるように、社会的反響もロシア文学関係の企画としては異例に大きいものだったと自己評価している。ロシアでは『イズヴェスチヤ』紙で報道されたほか、テレビ（NTV）のニュース番組でかなり大きく（5分以上にわたって）取り上げられた。

なお、この日露作家会議のために全部で8冊の資料集が作成されたほか（①アクーニンと現代ロシアの推理小説読本、②ガンドレフスキー小詩集、③クーリツィンとロシアのポストモダニズム読本、④ソローキン読本、⑤トルスタヤ読本、⑥ペレーヴィン読本、⑦第1回日露作家会議の記録、⑧チハルチシヴィリ読本）、終了後に関連記事集が別途に一冊、作成された（ご希望の方には実費で頒布いたしますので、スラヴ文学研究室までお問い合わせください）。

この企画の事務方の中心となって終始粉骨砕身努力してくれた毛利公美さん（現在・北海道大学スラヴ研究センター研究員）には、この種の国際会議準備のノウハウを後世に伝えてもらうべく、別途、記録と提言を書いていただいた。

2001年11月13日

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ博士特別講義

日露戦争をめぐるポーランド・日本関係（講義は日本語）

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ博士 Dr. Ewa Palasz-Rutkowska は、ワルシャワ大学日本学科教授で、日本史・日本ポーランド関係史の専門家。ワルシャワ大学は東京大学と協定を結び、長年にわたって学術交流を積極的に進めてきたが、ルトコフスカ博士はその交流の中心的な役割を担ってきた日本学者の一人でもある。東京大学社会科学研究所の客員教授として滞在中（2001年9月～12月）の機会を利用して、スラヴ文学研究室でも特別講義をお願いした。この講義の実現についてご高配いただいた社会科学研究所の小森田秋夫教授にお礼を申し上げます。

2001年11月16日

アレクサンドル・ドリーニン教授特別講義

ナボコフの『賜物』におけるコンテクスト（講義はロシア語，通訳なし）

アレクサンドル・ドリーニン Александр Долинин 氏は、1947年生まれ。ソ連科学アカデミー・ロシア文学研究所研究員を経て、現在、ウィスコンシン大学（マディソン校）スラヴ文学科準教授。ロシア語と英語の両方でナボコフ関係の論文や著作が数多くあり、ナボコフ研究の第1人者として活躍する気鋭の学者である。このたび日本ナボコフ協会の招待により初来日を実現することになり、日本ナボコフ協会総会での英語による講演（於広島大学，11月17日）に先立って、東京大学ではロシア語による特別講義をお願いできることになった。日本ナボコフ協会の関係者のご協力に感謝します。